

エゼキエルは主の栄光の輝きの中から語りかける声を聞きました。彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。」(エゼ2:1) エゼキエルは「人の子よ」と「霊」に呼びかけられます。Today's English Versionでは Mortal man (やがては死ぬ運命にある、この世の人間) と訳されています。ただの人、しかし、子よ、愛する者よ、と呼んでいます。しかし、愛する子を同胞イスラエル、反逆の民に遣わすといひます。語りかける声は 人の子よ、私があなたに語ることを聞きなさい。口を開いて、私が与えるものを食べなさい (2:8) と巻物を食べさせました。エゼキエルには蜜のように甘かったのです。これから語るべき主の言葉は、不可解な言語や難しい言葉を語る民に告げるのではなく、自分の民に語るのだと安堵感を与えます。ただ、民は心が固く、拒もうとするがたじろぐなと忠告します。命じ終わると、主の栄光が去ります。不思議な光景と酷な命令に、エゼキエルは わたしは苦々しく、怒りに燃える心をもって出て行ったが主の御手がわたしを強く捕らえていた(3:14) と、心に重いものを感じます。エゼキエルは捕囚民のもとに帰り、7日間、茫然として過ごしました。

7日の後、再び主の言葉がエゼキエルに臨みました。そして、預言者の務めは(1)イスラエルの見張り、(2)神の代わりに語る、(3)その言葉は警告の言葉であると伝えます。そして、警告の言葉を告げなかったために民が死ねば、警告しなかったエゼキエルに民の死の責任を問うと言います。こんな厳しい仕事があるのでしょうか。エゼキエルは返事をしませんでした。そこで平野に出て行くように命じられます。そこで、ケバル川の河畔で見た栄光と同じ主の栄光が留まっているのを見ました。エゼキエルがひれ伏すと霊は様々な幻を語ります。



まず一個のレンガを手に取り、その上に都エルサレムの形を刻み、置き、周囲に破城槌などを配備してエゼキエルが包囲せよ、という幻を見せます。それは神がエルサレムを裁くために包囲したのだというイメージです。次に同胞北イスラエル王国の罪のゆえに390日、ユダ王国の罪のゆえに40日間、エゼキエルがその罪を負って、身動きできないまま、横たわって包囲せよと命じます。

その期間、エゼキエルは一日に20シェケル(228g)のパン、六分の一ヒン(600cc)の水しか飲んではいけません。しかもパンを人糞で焼くと命じられます。極貧の食事であり、穢れた食事です。罪のために負う苦難や屈辱は当然の報いであるというイメージです。

次に神は包囲の期間後に、「剣」でエゼキエルの髪、髭を剃れと命じます。エゼキエルの毛はエルサレムの祭司たちを指しますが、彼らも裁きの徴である「剣」を受けるといいます。毛の三分の一をエルサレムの都で燃やせ。三分の一を都の周囲で剣で打て。残りの三分の一を風に散らせと命じられます。燃えた毛から、さらに火が出て、イスラエルの全家に及び、焼き尽くされる。疫病、飢え、流血で命を落とす。あらゆる方向に散らされたものをも剣が追うと徹底的な裁きのイメージです。

神は「イスラエルの山々、山と丘、川と谷」を思い出させ、そこを偶像の祭壇、高台、香炉台としたことのゆえに裁くのだと伝えます。すべて破壊され、砕かれ、廃墟となり、荒地とされる。エゼキエルは、「終わりが来る。地の四隅に終わりが来る」ことを告げよと命じられます。銀や金も役に立たない。自分たちを滅ぼされたのは主であり、それには民の背信の罪という理由があった。さらに、その滅びのさきになにがあるのかを思った時、エゼキエルには「主を知る」ことだけが残されていました。